

第15回 夏期福音特別集会(鹿沢)(4)

全人——エペソ書第4～6章——(縮小版44%)

1968年8月25日

小池辰雄

私は、「わがキリスト」この一道を死にいたるまで貫くつもりです。これが私の使命であり、また、私たちのこの群れの歴史的な使命であると思っています。使徒たちがじかじかに受けたところのこの福音の真骨頂、それを貫かなければいかん。そういうことでありたいと願っています。エペソ書4章にきて、

「主に在りて囚人たる我」

と。パウロはローマに囚われて獄にいたが、見えざる綱、「愛の綱」でキリストに引っぱられている囚人である。これは愛の綱ですから凄い。この綱を誰が断ち切ることができるか。パウロは誇りをもって自分を「キリストの囚人」とした。

「誰がこのキリストの愛から私を離すことができるか」

と。ローマ書8章の終りはその絶叫です。この聖書は、ただ御言みことばといって勿体ぶっているのではない。これは本当に我々に対する熱烈なる恋文である。

1……囚人たる我なんじらに勧む。汝ら召されたる召にめし適かないて歩み、2事毎に

謙遜と柔和と寛容とを用い、

この力をおびているパウロは、自分で力を決して私しませんから、その平伏しの姿からこういう言葉が自然に出てくる。自分に何ものも期待しないところの八方破れの人。私は今日、「全人」と書きましたが、これは「完全無欠の人」ということではない。「八方破れ」ということと、この全人とは同じことです。

愛をもて互いに忍び、

と。キリストの愛でなければ、忍べませんよ。何か道徳だなんて思っではいかん。パウロの勧めの言葉を道徳の次元に下ろして読んだらダメです。そうしたら、また「新しい律法」おきてができてしまう。たいていそんな読み方をしている。どのような言葉も、「ああ楽しいな、そうですよ」と——自分ができなくなつていい——魂がそういうような答えをしてくるような読み方になってくる。

3平和の繋つなぎのうちに勉つとめて御霊の賜う一致を守れ。

「一致」というならば、「御霊の一致」の他にない。「和」というならば、御霊におけるものの他に和がない。

4 体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召めしにかかわる一つ望みをもて召されたるが如し。5 主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、6 凡ての者の父なる



神は一つなり。

「一つ、一つ、一つ」と。この「一」という渾然^{こんぜん}一なるもの、分裂のなきもの。キリストは、

「我と父とは一つなり」

と。パウロもヨハネもペテロも、「キリストと一つなり」というところに入った。それでは完全無欠か。決して然らず。その「一」ということが本当につかめたらばもういい。

この森羅万象、もう実に数えきれないところの諸々の現象、それを統括しているところのものは「一者」である。これが大宇宙を素晴らしい法則のうちに動かしている。もし、その一なるひとつの驚くべき何ものかがなかったならば、この森羅万象の在り方は乱れてしまう。混沌になる。コリント前書12章をちょっとみますと、

「¹² 体は一つにして^{えだ}肢は多し、体の肢は多くとも一つの体なるが如く、キリス

トも亦然り。¹³ 我らはユダヤ人・ギリシヤ人・奴隸・自主の別なく、一体と

ならん為に、みな一つ御霊にてバプテスマを受けたり。而してみな一つ御霊

を飲めり。」(コリント前12・12～13)

「而してみな一つ御霊を飲めり」という。私たちのこの体^{からだ}はなんと不思議な微妙な構造をしているか。これがちゃんと統括がとれている。この「一なる霊」があるからです。この一なる霊が神の霊に電流的に、霊流がつながっていなかったならば、人間はどうしても行き詰まる。分裂する。キリストが私たちの一なる中心です。その中心が私たちの中にまた御霊として中心を与えてくださる。聖霊という一番深い中心体がくると、もうギリシア人もユダヤ人も奴隸も自主も何もない。

人の身体^{からだ}の肢々のごとくたくさんの人種があります。どれでもいい。しかし、そこにいたい共通なものは何かという、みんな人間であることです。イデオロギーで共通にしようとしたって、そんなことは無理だし、そんな全体主義は真理ではない。それぞれの特殊性とそれぞれの役割というものがある。しかし、それが何によって統括されるか。人間が考えるところのいかなるものにもよらない。人間というものを本当に人間たらしめるところの最後のものは、神の霊です。

「エホバ神^{いけるもの}土の塵を以て人を造り、^{いのちのいき}生氣をその鼻に吹き入れたまえり。人

即ち生霊^{いけるもの}となりぬ」(創世記2・7)

とある。「生ける霊」という。このユダヤの神話は驚くべき真理をもっている。「神話」だなんていつて片づけるからいかん。どうして、神話という暗号をとおして示されているところの真理を見ないか。「みな一つ御霊にてバプテスマを受けたり」という、このパウロの宣言が今、キリスト教界で果して現実であるか。

御霊が御霊にこたえる。人間の魂はごまかしがきかない。どのような良さそうなものを持ってきたても、究極のものにぶつかるまではどうにもならないようにできている。私たちは、この神の大霊に接するまでは安きをえない。「汝の懐^{ふところ}に休ろうまでは安きを得ない」と、



アウグスチヌスが言ったとおりです。「聖霊のバプテスマを施すために、私のあとに来る人がある」と、洗礼のヨハネが言った。キリストは御霊のバプテスマを与えんがために来た。しかし、地上にあったキリストは、それはなさらなかった。ひとつ問題があるから。

「どうしても自分自身が受くべきバプテスマがある」

とキリストが言われた。それは十字架であった。「十字架を通ったならば——贖罪の大業をしたらば、旧約聖書の事態を完全に自分が全うしたらば——お前たちの中に今度は入っていく」と。キリストの霊は贖罪をなしうるただ一つの霊である。私たちを完全に贖いとる。

霊肉渾然として贖いとられるのは、それからまだ先のはなしです。これは最後のところ。けれども、我々の信仰的現実において、今の私たちの現実においては、はつきりと「十字架と聖霊」ということで、私たちがどんなにガラクタであろうと、救われている。救いは確かである。自分のいかなるマイナスも決してキリストのプラスをマイナスにすることができない。十字架上の片一方の盗賊も、キリストは真つ先にこれを天界に、

「汝、我と共にパラダイスにあるぞ」

と言って、連れて行かれた。これが即ち、「一つ御霊にてバプテスマを受けたり」ということ。私たちが一つ御霊のバプテスマの中に入っていると、もう言わず語らずのうちに、本当に兄弟姉妹ということがひびいてくる。

私たちはみなそれぞれの大事な、「天下一品」の存在で、^{えだ}肢々であります。そしてこれは決してバラバラな個ではないから、みなそれぞれの役割をもつて神の国を建設し、どのひとつが崩れても石垣が崩れるというしまつです。それは天国を築くためには大事な一人びとりです。大きなろが小きろが、三角であろうが四角であろうが丸であろうが、何であろうが一向に差し支えない。そういう、神に即したところの自覚が「天職」という。

「^{からだ}体は一つ、御霊は一つ、望みは一つ、主は一つ、信仰は一つ、神は一つ」

と。この「一」はもう渾然たる一であつて、これはバラバラの一ではない。「神・キリスト・我」「望み・信仰・愛」がみんな「一」となつて、自分はそういう一者であると。現実には成りきっていませんよ。しかし、このキリストを受けた現実にはその核がそこにある。

昔から、キリストを信じませんが、第一流の人物は、言葉の深い意味で霊的である。ロダンはその彫刻に魂を打ち込んでいる。ロダンの彫刻がなぜもの凄いかというと、その一つひとつの彫刻に全存在が打ち込んでいる。「全人」とはそういうことです。なにか「道徳的に全き人」ということを言っているのではない。「本当に打ち込んだところの在り方」が全人的在り方という。その人がどんな人でありまして、その時その場において自分の生命をかけて事に当たっている。それは全人的角度という。

そういう意味の「全人」というのは、普遍妥当的なあるひとつの型の人を言っているのではない。ひとりの人の全人性というものは隣の人の全人性とはちがう。また、「昨日の我」というものと「今日の我」というものは、表れ方がちがう。千変万化するが、しかもそれ



は一つである。ダイヤモンドはいろんな光をピカピカと顕している。しかし、ダイヤモンド自身は無色透明である。この無。根底が無ということ。

「無」は同時に「霊」ですよ。虚無ではない。私たちがキリストの十字架ですつ飛ばされたところに住まいたもうところの聖霊は万人に内住したもう。「なかなか、聖霊は私の中には入りそうありません」なんて、何を言っているか。十字架でちゃんと聖霊の入るところはできている。できているのに、「できていません」なんて。それはキリストの十字架を本当に受けとらないから。行き詰まったら平伏しなさいよ。自分で打開しようなんて思わないほうがいい。

聖霊がくると、その人のいろんな要素というものが、それを貫いて自由自在に表れてくる。人間だから滑ったり転んだりする。いいよ。そうしたら、本当にいつも平伏して行きなさい。しかし、ノホホンでいるわけじゃない。平伏すごとに十字架の中にどしどし奥へ入っていく。

「我は門なり」の先に霊界がある。霊界とはなにか特別な所を言っているのではない。この現実界の中に霊界がちゃんとある。日常生活の中にもう限りなく豊かな神の恵みが見えてくる。見るもの聞くもの体験することはみな本当にその人において化体され体現されていく。「聖書の御言」なんていつて奉つてないで、聖書の言葉が化体する、受肉する人にならないといかん。我々は「聖言受肉体」とされていく。もう終いには、「聖書は要りません、みんなこれは受肉してしまいました」ということになる。

6 凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。

超在し貫在し内住内在したもうところのものである。神は一切のものに、万人に、およそすべての現象に在したもう。パウロにおいて、「神・キリスト・聖霊」は一つです。「神は万物に超在し、主は万象に貫在し、聖霊は万人に内在したもう」と私は自然に書いてしまった。

7 我等はキリストの賜物の量に随いて、おのおの恩恵を賜わたり。8 され

ば云えることあり『かれ高きところに昇りしとき、多くの虜をひきい、人々に賜物を賜えり』と。9 既に昇りしと云えば、まず地の低き処まで降りしに
あらずや。

不思議なことが書いてある。地獄まで降り、また天界にまで昇る。

10 降りし者は即ち万の物に満たん為に、もろもろの天の上に昇りし者なり。

11 彼は或人を使徒とし、或人を預言者とし、或人を伝道者とし、或人を牧師・

教師として与え給えり。

いろいろな役割を与える。皆さん一人ひとりが生涯をかけて——皆さんは、その人をはずしたらそこにひとつの穴ができるような一人ひとりです——そういう「天職」、文字通りの天職的な使命を持つ。この場合の天職というのは、なにかただ職業のことを言っているのではない。家でなにかをなさつていても、みな天職です。もろもろの文化現象の根底



には本当の宗教がなければ、文化はみなあだ花となる。福音はすべての根底、根の世界です。

¹²これ聖徒を全うして職を行わせ、キリストの体を建て、¹³我等をしてみな信

仰と神の子を知る知識とに一致せしめ、全き人、すなわちキリストの満ち足れるほどに至らせ、

この「全き人」から私は、題を「全人」としたのですが、しかし、それはいわゆる完全無欠という全さとは違うということを知っていただきたい。讚美歌の121番に「この人をみよ」というのがある。「視よ、この人」と言つてピラトが指した。キリストのことです。「視よ、なんたる人か。キリストというのはいまだ名状できない人である」と。私たちはキリストとはちがいますから。罪びとです。しかし、この「視よ、この人」という質が——私たちはそれぞれ破れ器でありながら、分裂のない破れさ——そういうようなのがこの「全人」ということ。天界において神さまが仕上げるところの、そういった意味の「全き人」とは、このところはちよつとちがいますけれども。しかし、そのような全き人も、その土台となるところの、その分裂のなさの在り方が自然天然なんだ。

とにかく、ひたむきなものにぶつかつて、感動しないような魂ではダメですよ。そういうのが、私がつかまえているこの「全き」という意味です。「全き」というのは何といひますかね、全的でありまして、そこにこそ本当に神の力、聖霊がそういった魂には臨んでくる。聖霊を受ける体勢は何かというと、それなんです、要するに。「投げ込み」です。自分自身——足だけ出すのでも、手だけ出すのでもない——全存在を投げ込む。投げ込んだ世界には必ず聖霊がくる。あの十字架の片一方の盜賊は投げ込んだわけです。「もうしようがありません。私は生涯悪いことをしたから、極刑に処せられても仕方がない。せめても覚えてください。あなたが天国へいらつしやるときに」と。もう投げ込みの魂です。そういう投げ込みの魂がキリストは大好きなんです。

「よーし、お前は今日、私と一緒にパラダイスだ。さあお前を連れて行くぞ」

と。彼の魂は真つ先に天国へ入つてしまった。キリストの十字架を生ま生まにそこで受けているんだから、この盜賊は。キリストの十字架を一番じかじかに受けて、その恩寵にあずかった者は、片一方の十字架にいた盜賊だ。

²³心の霊を新たにし、²⁴真理より出づる義と聖とにて、神に象り造られたる新

しき人を著るべきことなり。

「新しき人を著る、キリストを着る」とか、パウロはよく「着る」というようなことを言う。皆さん、「祈れない」なんてことはひとつもないですよ。「わが主イエス・キリストよ、わが一切なる主よ。アーメン、ハレルヤ!」と。これが祈りです。祈りの極致はそれです。頭で考えたらもう第一歩からダメです。「投げ込み」です、すべてが。これが全人的な在り方。仕事に向かおうが、勉強に向かおうが、何でもそうだ。そういうようなのが本当に、「新しき人を着よ。新しきキリストの衣を着よ」ということ。キリストの霊衣を着よと。霊的な



衣を着る。キリストはなんと素晴らしい現在、活けるキリストか。今もなおいいよ天界に生きて、霊界に生きてありたもうこのキリスト。信ずるとは何か。この「キリストの愛を受けとる」ことです、活けるキリストの愛を。二千年前も今も同じこと。そして、その「霊を受ける」ことを具体的に、「衣を着る」とかいろんない方をするだけのことはなしです。

³⁰ 神の聖霊を憂いしむな。汝らは贖罪の日のために聖霊にて印せられたるなり。

この「贖罪の日」というのは霊肉渾然^{こんぜん}として本当に天界に救われる日のことを「贖罪の日」と言った。私たちが言っている贖罪(十字架)とはちがう。

³¹ 凡ての苦・憤恚・怒・喧騒・誹謗、および凡ての悪意を汝等より棄てよ。

³² 互いに仁慈と憐憫とあれ。キリストに在りて神の汝らを赦し給いしごとく
汝らも互いに赦せ。

イエス・キリストから七度を七十倍もして赦された私です。抵抗しているかぎりはダメだよ、赦すわけにはいかん。しかし、「悪かった」と言ってくれば、それを私がもし赦さなかったなら、私はパリサイだ。互いに本当に赦し、また迫害する者のために祈る。「敵を愛する」ということと「迫害する者のために祈る」とは同じ質です。愛するとは担うことです。この担いあげの魂は、力ある聖霊の人となつたときにできる。この愛がくれば、いいよもって私たちは力強い人にされていく。それがないと、いいよだんだんダメになっていく。この事実がごまかしがきかない。霊的現実の事実というのはそうなんだから仕方がない。

それから5章の1、2節、

¹ されば汝ら愛せらるる子供のごとく、神に效う者となれ。

不思議な言葉だね。童心です。「幼児の如くならなければ、天国に入れない」と。童心を持たなければ天国に入れないという。偉大な人間は童心を持つていた。おさな心。幼児がおもちやで遊んでいるときは、あれはみんな全人の姿です。

² 又キリストの汝らを愛し、我らのために己を香しき香の献物とし犠牲として、神に献げ給いし如く、愛の中をあゆめ。

花は姿もいい。香りはなおいい。香りある人。なにか香りの漂っているような人。これは聖霊の香りがその人をおして、その人らしい香りを発してくるわけだ。そういった献げ物。「神に献げ給いし如く」という。私たちが本当に神さまに芳しき人、生涯が本当に香りを発した、聖霊の香りあるところの人。何ともいえない気品というのは、この破れ衣の土の器に気品がある。何とも本質がつかめない。いわゆる立派さでもない。

6章は10節から、

¹⁰ 終りに言わん、汝ら主に在りて其の大能の勢威に頼りて強かれ。

「大能の勢威」というような言い方が三、四回出ている。パウロはいよいよ自分が殉教の死をとげるときが近くなってきたから、後輩たちに向かって、「戦うんだぞ、この福音で。大丈夫、勝てるぞ」と言う。「汝ら雄々しかれ、我すでに世に勝てり」とキリストは言われた。



11 悪魔の術に向かい立ち得んために、神の武具をもて鎧うべし。

非常に戦闘的ですね。こういう言葉は自在に、みんな霊的な事態のことを言っている。

12 我らは血肉と戦うにあらず、政治・権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある惡の靈と戦うなり。

「天の処」といったって、これは本当の天でない。非常に低い天のこと。悪霊がこの世のいろいろな政治や権威を掌握して、悪いことをやっている。政治なんてものはひとつの権謀術数の代名詞みたいなものだ。キリストはそんな権威はひとつも権威と思っていない。「復讐するは我にあり」と神さまは言ってらっしゃる。黙示録の最後のところで見てごらん、いわゆる権威者たちがみんな慌てふためいて逃げまどうことが書いてある。

そういう厳かな神さまの支配、キリストの支配があるということが、私たちが人生に対する本当の底力をもつて、平安をもつて、本当の希望をもつて歩きうるゆえんです。どう人に思われようが、どんな取り扱いを受けようが、誰に認められなろうが、神さまはご存じである。最後の日には、それは必ず良きようにされていく。

過去・現在・未来を本当の意味において掌握しているような魂。本当の義というものがどういうものであるかに貫かれている者、本当の愛がどのような事態であるかに本当に力付けられて底力をいただいている者、それがこの霊的次元の人物です。新次元の人物とはそのような歩き方を、老若男女いかなる人もその質を持っているということなのです。

13 この故に神の武具を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ちむかい、凡ての事を成就して立ち得んためなり。14 汝ら立つに誠を帯として腰に結び、正義を胸当として胸に当て、15 平安の福音の備えを靴として足に穿け。

「至誠天に通ずる」という「誠」です。「正義を胸当として」という。これも「正義」なんて言いたくない。「義」でいい。キリストの誠、キリストの義です。本当に神・キリストに安らつて、平安を与えるところの福音。どんな不安な所にあつてもキリストは平安であつた。嵐の中の、木の葉のごとく揺れる舟の中で、もうじき引っくり返るなんて思われる不安そのもののところで、キリストは眠っていた。これが平安の福音という。まあなんと驚くべき人ですかね。

16 この他なお信仰の盾を執れ、之をもて悪しき者の凡ての火矢を消すことを得ん。17 また救の胃および御霊の剣、すなわち神の言を執れ。

キリストの救いは私の側の一切に関わりないから。ダメなやつこそ救われる。これは親鸞の歎異抄と同じだ。「仏法は善きも悪しきもへだてなしわが本願にもらすものなし」という歌がある。善惡のへだてはないよと。この仏法の仏の本願にもらすものは一人もない。キリストのあの山上の垂訓の、

「父は善き者にも悪しき者にも、直き者にも直からざる者にも、正しき者にも正しからざる者にも、雨を降らせ陽を照らさせている。汝ら、父の全きが如



く全かれ

という言葉。救いは、「相手がどうであるこうである」ではなかった。いかなる事態も救いはそれよりも強い。その次に、「御霊の剣、すなわち神の言を執れ」ときた。「剣を投ぜんために来た」とキリストが言われた。それは「御霊の剣」であつた。それは神の言、「神言」、「霊剣神言」ということです。即ち、御霊の剣と神言とは離すことができない。

神の言はサタンをぶち破る。そして、サタンをぶち破る神の言は、いかなる人をも救い上げる言である。サタンをやっつけるものは、何のためにやっつけるかというところ、その人を本当に救いあげる。どんな悪人も、それ自身が悪いんじゃない。その魂が何に仕えるか。魂がまちがっている。その魂を本当に引っくり返せば証者となります。この「御霊の剣」という言葉は私たちにとって本当に救いの言葉です。「我によらずは何事をもなしあたわず」は、「我によれば何事をもなしあとう」と引っくり返して読む。キリスト自身が、「人にはあたわぬ分を神はなす」と言われた。「神はなす」ということは、「神がお前たちを通してするぞ」ということ。福音の世界は具体的な世界ですから、我々このダメなやつを、どうにもならないやつをこそキリストは喜んで使う。御意の発するところ、そこに私たちは自分の思いにすぐることが生じてくる。行き詰まりを知らない人になってくる。

「為^せんかた尽くれども望みを失わず、倒さるれども亡^びず。これ神の大いなる力の現れんためなり。日々にキリストに死に、キリストに生きる」

とパウロは言った。パウロの言葉はもう生命の息吹です。全部告白です。

17 また救^{すくい}の胃^いおよび御霊の剣^{つるぎ}、すなわち神の言を執れ。

と。これは言葉をただ覚えることではない。パウロが「執れ」なんて言ったけれども、私は、「神言が受肉せよ」と言いたい。「言が受肉、化^{かたい}体しなさい」と。神の言が受肉化体してくれば、なるほど、「我が言は霊なり生命なり」というキリストの仰ったのがわかる。

聖書は、もし重かつたら、ヨハネ伝でも、ペテロでも、ヤコブでも、パウロでも、何でもいから、一冊破つて分冊にして、ポケットに入れておけばいい。そして、電車の中でもどこでも読む。「生き聖書」みたいにひとつなつてくさいよ。

「全人」とは、固定した何か全さを言っているのではない。動いてやまないことなんです。この「全人」というのは。いつも満たされながら、どんどんと展開していく人です。千変万化変わっていながら、実は本質においては一つなるものがグーッと動いている世界です。

「神の言を受肉化体しろ」と。こういう御言が本当に私たちの力となる、読めば直ちに。そして、この言の文字面ではない。この言の奥の言、根源語、その言が発せられているところの現実なんです。意味じゃない。内実です。生命的な霊的な内実をつかまえる。

18 常にさまざまな祈りと願いとをなし、御霊によりて祈り、また目を覚して凡ての聖徒のためにも願いて倦^うまざれ。

その祈りは成就していくぞと。祈りこそ力強いものはない。最大の力はこの祈りである。



キリストはなぜ、力ある人であったか。彼は祈りのひとである。祈りは神の力を受ける状態ですから。祈りそのものが何かではない。その祈りにおいて帰するものは即ち、体受している。「自分のからだを投げかけ、全身に受けとる」というのが祈りです。言葉じゃないから。もちろん、言葉は発するし、沈黙でもいいし、そんなことはどうでもいい。霊界の力の世界はちょうど電波が今ここにきているのと同じように、霊的な波動はもう言わず語らずのうちにお互いに交流している。神さまがみな上からきてこれをやっている。

ある兄弟のことをさんざん祈ったけれども、その兄弟はどうとう死んでしまった。それは神さまの方ではちゃんと、「それは向う側(天界)へやるよ」と決まっています。その祈りは聞かれないけれども実は、その聞かれないことにおいて、祈られた以上のことが聞かれている。それが私たちの御意に対するところの絶対信頼の世界です。祈りが、「熱心でないから聞かれなかった、熱心だったから聞かれた」とか、そんな勘定の仕方をしてたらダメです。結果はどうなろうと、そんなことはいい。とにかく、祈りにおいて神さまと交わって、それが深くなっていけばいくほど、すべてのことが最善となっていくことを信じこんでいくことです。

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とキリストが言われたのは、ただ現象面をキリストは言われたのではない。キリストに癒されたり、キリストがいろんなことをしたあの福音書のいろんな人たちが、本当の信仰に入ったかは別問題。いろいろな徴をとおして、キリストはいったい何を見させようとしているか。何を与えようとしているか。彼自身なんです。

「我を信ぜよ。わが業^{わざ}において信ぜよ」

ということは、業をただ信ずるのではない。「業において、言において我を信ぜよ。この我を受けとれ。ただそれはひとつの道にすぎないんだ」と。それで、キリストを受けとることが本当の信の世界。彼らはそれが大方はできなかった。ある意味において仕方がない。聖霊がこなければ、そこまでいかないから。けれども、そこを突破して行つたのがあの使徒たちです。そして、とうとうキリストを受けとってしまった。「我を視よ」という、ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、パウロになつてしまった。

皆さんはダメのまんまで、「我を視よ」が言えるんですよ。ダメのまんまで。ダメだからこそ、キリストは入ってくる。そして、「我を視よ」ということがそこにある。その不思議な二重構造ができている。そこに本当の全さというものが、全人的な動きが働いてくる。なにかしらんけれども、内側からグーッと貫いたものが来てしまう。

19 又わが口を開くとき、言を賜わり、^{はばか}憚らずして福音の奥義を示し、²⁰ 語るべき所を憚らず語り得るように、我がためにも祈れ、我はこの福音のために使者となりて鎖に繋がれたり。

と。パウロも弱さを持つているから、もう大胆率直に言えるように祈ってくれよと。



それで、私たちはこのエペソ書をとおして、「万象は主に帰する」。焦点は、一切の現象は主に帰するようにできている。私たちはそのような驚くべき福音を受けるために「個」、この個が「新次元の人」に御霊によって救いあげられ、次元の違ったものに私たちはなる。ということは、「次元の違ったものを内に持つ」ということです。そうすると、どんなに破れかぶれの人間であつても、何かもう違うんです、本質的に次元の世界が、自分のいるところが。あいかわらずダメだつて、そんなことはいいですよ。

「神の奥義」とは、「キリストそのものが神の奥義の現象体である」と同時に、このキリストと結びつくところの個と、およびその個の群れ、エクレシア、「羔の婚姻」という最後の表現をもつて言われているところの、「首と体の事態」この不思議な事態、またある意味において大家族の事態、このことが「神の奥義」といわれたところのことである。

そして、私たちがこの世において万人救済に向かつて進むためには、どうしても最後にそういった聖霊の「全人」的な在り方をもつて実存していくこと。もろもろの霊にとらわれてその手下となつているこの世の中の様々な現象に対して戦つていくことは、聖霊のこの力において神の大いなる大能が、キリストの力が本当に現れる。この20世紀の後半30年を突破するのは、そのような霊的、新人としての、ぶちまけていくところの「全人」の、そのようなキリスト者。これをパウロはエペソ書において望んで、戦つて行つてくれる。「必ず勝つぞ」と。その戦いは、サタンは倒すが、人は救いあげていく戦いである。サタンを倒すのは、私個人が倒すのではない。あなた方一人ひとりが倒すのではない。これはキリストが私たちにおいて勝つてくださっている。何の心配もいらん。

どうぞ、皆さん、いろいろなことにこれからでつくわすが、「何も恐るるなかれ。わがうちなるこの霊に誰がかなうか。このキリストの霊にかなうものが、いずこに天上天下あるか。このキリストの驚くべき生命力、力、愛、これを何ものが離すことができるか」と。一切を救い上げていくところのこの悲願。驚くべき祈りの担いの人となる。白熱的な人となる。たくさん、あなたのよこしまなものが今、日本はよこしまな霊が、唯物的、享乐的、様々な傲慢な霊や、いろんなものが動いている。社会も、さまざまの悪しきことがはばをきかしている。これに対して自在なる戦いをなしていくためには、そのような自在な霊となる。皆さんが、特に青年諸君が、「よし、やるぞ」と、それで進んで行つてください。

皆さんと本当に一つとなつた、一全となつた、この一全の事態を本当に聖名を讃え奉ります。パウロは私たちに御霊をもつて、この御言をかくも私たち迫ってくれた。もう言うことなし。腸の底から皆さんは、「然り、そうだ。私はもうそれでいくぞ」と言つて進んでください。あなた方は気合があつたら、もう二義的、三義的なことはすつ飛ばして、「よし、一緒にいこうじゃないか」と、そういう青年男女が本当の天的恋愛というんだ。そういう結び方をしてくださいよ。もうその大事な一点でもつて火花を散らして進んでいく。これは必ず人生は本当の勝利です。おしまい。

